随想　専門家（プロフェッショナル＝プロ）とはなんだろう、と考える。

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

著者には、印鑑を作るプロの親友がいた。いる、と言いたいのであるが、残念ながら四～五年連絡が取れない。消息も知れないため、息災かどうかわからない。なので《いた》という表現にした。

中学生時代から本当に親しくしていた。著者が大事にしている実印も個人的な銀行印も、彼が彫ってくれたものである。

彼は『学歴に頼らずに、社会に挑戦したい』と著者に語り、あえて大学へ進まずに印鑑を彫り、販売する《ハンコやさん（と彼は自分のことを称していた）》になった。

彼の話は教訓に富む。彼が著者の実印を彫りながら、次のように語ってくれた。

「カレー屋があるよな！　特別なレストランの一杯五〇〇円の特別なカレーもあるし、駅の立ち食いで一杯一〇〇円（注一）のカレーもある。どちらがプロのカレーって言えるか？　俺にとっては、五〇〇円のカレーも一〇〇円のカレーもどちらもプロのカレーなんや。ごちそうとして食べるカレーを作るのは確かにプロや。しかし、一〇〇円カレーを作るのもやっぱりプロなんや。俺は、駅の立ち食いカレーみたいに手軽に手に入れることのできるハンコを作るプロになろうと思う」

当時も今も、著者にとってのプロとは特別な存在で、《専門分野なら、任せて!!》とすべての責任を負える存在であることを求めてしまう。しかし、その友の言う《プロ》もうなずける。

「お腹がすいて、でも時間もお金も足りないとき、ちょっと入って一〇〇円ですぐに食べられて、それなりに満足できる、そんなカレーを提供するのも、プロやと思うねん！」著者の思い入れるプロとは違う、しかしそれで生きていけるのは、やはりプロであろう。

いろんなプロがあってしかるべき、と思わされたものであった。

今回の海外出張で辻堂魁（注2）が書いた『風の市兵衛』という時代小説を読んだ。

随分前に、ＮＨＫのＢＳ時代劇でも放映されているから、ご存じの方も多いであろう。

時代は文政の中期、徳川家斉の頃を舞台にしている、一風変わった痛快時代劇である。買って読んだものだが、ｅＢｏｏｋでは第一巻から二〇巻までまとめたものがあり、結構読み応えがある。

ストーリーは痛快活劇で、ここに紹介するまでもない。しかし、あえて取り上げたくなったのは、この辻堂魁という作家の博識さに感服したからである。

沢煮、風呂鍬、雁木、白皙、徳利門、草高、切符米、米一俵、練塀、別式女、荷足船、押送船、平田船、玄趣、これらの単語が意味するところはおわかりだろうか?!　正直、著者はこれらについて、わからないことばかりであった。「米一俵くらいは…」と思われる読者はおられるだろう。しかし、米一俵に四斗入るものと三斗半のものとがあり…と続けられれば、その時代背景がわからねば理解し難い上、年貢を納めるのに、六公四民か五公五民か、一俵の単位を併せて整合性を取りながらストーリーを考えるのは、至難の技である。

時代背景を踏まえ、現在はない環境で生きるさまざまな人々の条件に齟齬が生じないよう、そしてその場に居合わせたかのような生き生きとした出来事の組み合わせを少しずつ進めて、スリリングなドラマが展開されて行く。

現代小説でも、時代ものでもストーリー展開に加えて環境や背景のディテールが具体的に描写されていればいるほど、自分がその舞台に臨場しているかのようなのめり込みを体感できる。

最近流行りの「バーチャルリアリティー・アバター（自分の身代わり）」のように機器等使わなくとも、読者を物語の世界へ呼び入れてくれるものである。

その意味で『風の市兵衛』のストーリー展開には、時代背景、それを踏まえての人々の生活や環境、さらには表情まで含めて、物語展開の伏線への気配りが細やかで、それこそ、その時代、その場にいるような気持ちにさせられることもある。

前にも取り上げた上田秀人氏の時代小説シリーズでも感じたことであるが、登場人物の時代背景や生活感、さらには主人公を取り巻く人々の表情や日常までに筆が及んで、その時代のいろんな人々の生活まで共有させるような筆致は、さすがに「プロ」を感じさせる。

実は『風の市兵衛』という小説を読むのは二回目である。一度目はもう三～四年も前になろうか？　最初は小説の名前が何となく肌に合わない気がして、手に取る気にならなかったのであるが、親しい友人に勧められ加えてシリーズの一作がＮＨＫのテレビドラマ化されたこともあり、読み始めたものである。タイトルから受けたイメージとは異なるストーリーの緻密さや設定、登場人物たちの心理描写等、物語へ引きずり込まれてしまった。

今回は海外出張の徒然に、電子書籍（eBook）版で全巻を通して読んでみた。そして、改めてプロの印象を受けた。いかに時代背景の諸事情を詳細に調べ、それぞれの出来事と架空の設定を無理なくマッチさせるように工夫しているか、登場人物たちそれぞれの性格を設定し、それぞれがそれぞれに合った言動をとり、その組み合わせで齟齬なく話が展開するよう展開させているか、時代背景にマッチするように現代では耳にすることもないモノが取り上げられ、理解が滞らないように、都度毎にキメ細やかに説明がなされている。また、辻堂魁氏は食べ物への造詣が深いのか、著者等耳にすることもないさまざまな料理を折りに触れて登場させている。

合本『風の市兵衛』には一から四〇話までを二冊にまとめられている。その中には、さまざまな舞台でさまざまな人間模様が描かれている。

娯楽小説であるから、勧善懲悪ではあるが、中に人としての弱さ、強さがない交ぜとなっている。涙を誘う逸話、クスリとさせられる物語が次々に披露され、飽きることがない。この合本は、シリーズで書き連ねられているから、何年もかかって紡ぎ出されている。それを一息に読むのも、作者の心意気や作風を感じられて、また面白いものである。

微に入り細に入った調査や記述に感心させながらも「今年をもって××歳となる」という文に「さしもの辻堂氏も、こんなところで手落ちが生じるか?!」と少しはクスリとさせられる（注3）。

それにしても、小説を書くに当たっての詳細な調査とそれらの組み合わせで、矛盾なくストーリーを創造する力は、まさにプロならではの仕事である。

先に紹介した、駅カレーのプロも社会のニーズに答えるものである反面、プロ中のプロといえるプロフェッショナル、著者はなれるものなら、後者でありたい。

注1：当時は今から五四～五五年前で、一ドルが三六〇円、著者の給料が二万五、〇〇〇円であったから、一杯一〇〇円のカレーは十分に採算が取れた。ちなみに、その当時に五〇〇円カレーはいかに特別であったかがおわかり頂けるであろう。

注2：一九四八年、高知県生まれ。早稲田大学卒業。出版社を退職後、本格的に執筆業を始める。『風の市兵衛』シリーズで第五回（二〇一六年）歴史時代作家クラブ賞のシリーズ賞を受賞。

注3：小説の時代は年齢は数え年。《今年××歳になる》は、その年の誕生日前を意味するが、当時は誕生したとき一歳で、正月明けに二歳となる。辻堂氏は、満年齢を前提としていたことになろう。